

人は常に強くなりたいと願っている。

それは本当だろうか？

私にはその意見を理解することができない。

強くなるということは身体的に、精神的に、どちらもだろうか。

いや、頭腦的でもあるのかもしれない。

でも、一つだけ言えることは、私には無理だということだろうか。

夜空を共に見つめている梟と鳴く。星は蒼く染まって輝いてる。

波飛沫が跳ねる、ゆっくりな水流だ。気付けば川が近くにあった。

夜色に染まる景色がやたらと幻想的だ。星と共鳴している梟と私がいた。

そこには、強さを求める姿なんてない。

だけど、自然はとても強いぐらいわかる。

だから、力を拝借する時は。

私はここに何度も来ているのだから。

星屑の中に、蒼さが輝く空を、見定めていた。私はきつとその空に恋をしている。

空に恋をする人ほど危ないらしい。空を飛ばうとして地に落ちるからだ。

そのときの衝撃は信じられないほど痛く、叫ぶ。

でも、それでも、恋というものは厄介なのだ。

恋は盲目だ。

人にこそ持つ感情を、自然に抱くのは、間違えなのだろうか。いや、そんなことはないかと、無駄な思考を繰り返すことによつて浪費をしている。何の？ もちろん、お金で買えない時間をです。

「はあ、また無駄なことをしている気がするのは気のせいかな」

「どうした？ 一翔」

「誰よ。私に名前なんてないよ。だから、どうでもいいのはあなたなの」

「論理だった説明をしてくれ。僕には理解できない論理を言われた気がするのは気のせいかな？」

「大丈夫、問題ないよ」

「それは著作権に引つかからないか？」

「神は言っている。お前はここで終わる定めではないと」

「メタな発言はやめましょう」

「はあい！ 金額的にもそれは出来ないと思うけど」

とりあえず、私は名前がない二人だという設定を続けたいです。

「でも、私達ってどういった存在なんだろうね」

「あれですよ。あの聖なる書物のアダと忬じゃないか？」

「いや、普通に言つてよ」

「じゃあ、林檎が堕ちるのを見て法則を知った人？」

「だから、林檎だけしかあつてないじゃん」

「ニューロン！」

「惜しい！」

とまあ、馬鹿みたいな会話をしているのですが、つまりはそういうわけだったのですよ。

「星屑う！ 私に物語の終わりを言ってくれ！」

「つまり、終わりを知りたければ、そこに治れということですね？」

「うん。だけど、論理だった説明の裏には強さがあるんだもんね」

「そうだな」

「じゃあ、強さって何だろうな」

「きつと、私達は強いんだよ」

「どうして？」

「だって、名前がないって呼ばれる対象がないってことなんだから」

「なるほど」

それは言えてるな――。